田検小学校
ヒストリア　～歴史秘話～
第１２号　　（26.3.12）

忍術師「護得久主（ぐゆくしゅ）」という人についてのヒストリアです。

【忍術師とは，変装・潜行・速歩など人間業とは思えない技を巧みに使いこなし，敵（人）の情報を調査したり，敵（人）を混乱（びっくり）させたりする人】

昭和50年11月に，**「渡　武彦さん」**（５年生 渡慶子さんのひいおじいちゃん）が書かれた**『親がなしぬしま』**という本の中に「ぐゆくしゅ」のことが紹介されています。

そこに書かれた話を紹介しましょう。

１　むかしむかし，須古村に「ぐゆくしゅ」という忍術師が住んでいました。

安政年間(江戸時代の1854年から1860年まで)，今から160年前の話です。当時３才のぐゆくしゅは，うるまの国（今の沖縄県）から移り住んできた父親に連れられて，須古村に住んでいた。４才の頃から須古のガサミ崎で毎日のように一人すもうをとったり，馬ころばしの術で通りかかりの馬を横倒しにしたり，ガサミ崎から満浦に飛んで渡ってみたりしていた。普通の人間とは違った力をもっており，忍術師としてみんなから注目されていた。ふだんは，子どもたちとは遊ばずにケンムンと遊んでいた。

６，７才の頃，ぐゆくしゅは須古の人々を集めて「みなさんが，砂糖を一樽（60～70kg ぐらい）くれるなら，ハリ目（かにの仲間）が住む砂の穴（長さ3cm）の中に入ってみせます」と言った。

人々は，「まさか，そんな事ができるわけがない」と思いながらも「砂糖一樽」を約束すると，ぐゆくしゅは言ったとおりにハリ目の穴の中に入って見せたのである。

９才の頃には，ぞうりを履いて，須古と湯湾の間の海の上を子どもたちを背負ったまま平気で歩いて渡ったという話もある。

１７，１８才の頃には，製糖工場（サトウキビから砂糖を作る工場）から須古まで両手と両肩（棒につるして）に砂糖樽（1個60～70kg ぐらい）を一度に８個もぶら下げて運んだという。その褒美として砂糖一樽を受け取ったらしい。

やがて成人したぐゆくしゅは，須古生まれのミズルという女性と結婚し８人の子どもに恵まれた。しかし，どうしたことか７人の子どもは幼くして亡くなり，末っ子のチョウエという女の子だけになってしまった。

ある日のこと，名瀬方面からの帰り道，大和浜にさしかかった時，焼内（今の須古・湯湾・田検あたり）方面に行く道が分からなくなったので，道ばたで竹細工（竹を切ったり削ったり編んだりして作った道具）をしていた３人に道を尋ねた。しかし，その３人が親切に教えてくれなかったことに腹を立てたぐゆくしゅは，「おまえたちは，おれのことを知らないのか！」と大きな声でしかり，３人が作りかけていた竹細工を，見る見るうちに形が見えなくなるように仕舞い込み，その場を立ち去ってしまった。

さあ，たいへん。「今の人が，あの有名な須古のぐゆくしゅさんに違いない」と大慌てした３人は，急いでぐゆくしゅを追いかけた。しばらくして，坂の途中で追いついた３人は，土下座して歌を詠み，謝った。

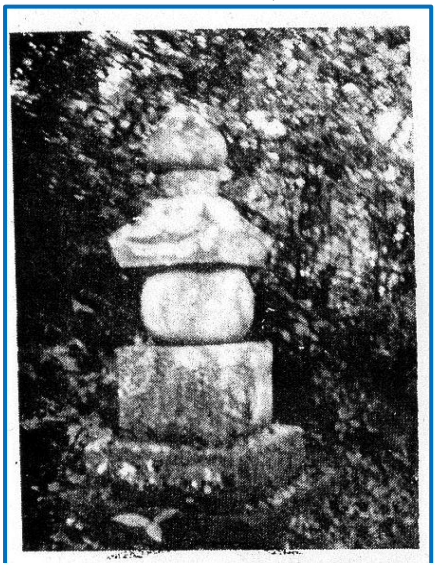
「情け深さや　焼内ぬ　ぐゆくしゅ
　　なつかしゃ　かなしゃ　またいもれ」

ぐゆくしゅを坂の下まで見送った３人が，急いで元の場所に戻ってみると，あの時，形も見えなくなってしまった竹細工が元どおりになって，そこに置かれていた。

その後，その坂は「ぐゆくしゅ坂」と呼ばれた。

（つづく）

（文責：福田裕生）



ごゆくしゅの墓（田検共同墓地内）